

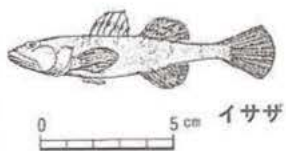
166. イサザビキ ——漁法と用具——

昨夜から降り続いた秋雨はまだ止まず、まだ明けきらない薄暗い湖面を濡らしている。2月下旬、暦の上では春というものの、雨着を通して寒気が体を刺す。ここは高島郡新旭町針江の漁港、私はイサザビキの船に同乗させてもらうために立っている。イサザビキとは、琵琶湖の特産魚であるイサザを獲るための底曳網の一種である。午前7時出港、普段は6時頃に出港するとのこと。漁師は2人、1人はトモで船を操縦し、1人はサキで待機する。漁場は新旭町木津沖約1000～1500m程の湖底が急に落ち込む所で、水深は10～60m。漁師達が「キシガタ」と呼んでいる場所である。船は全速力で漁場へ走る。雨が容赦なく顔面を叩き、眼鏡を曇らす。何も見えない。そういえば眼鏡をかけた漁師をあまり見たことがない。漁場が近づくとも湖面のあちこちにドラムカン程もある発泡スチロールのオオダル(浮子)が点々と浮いている。オオダルには200m程のロープが付けられて、先端は1.5m程の大きなイカリにより湖底に固定されている。オオダルは網曳きの際、船を固定するために用いるもので、漁師一組あたり2個ずつ保有しており、ここぞと思うポイントに一漁期設置しておく。漁師は2つのうちどちらかのオオダルを用いて操業することになる。この漁場では今津、梅津、塩津等の漁師が操業しているとのことである。時として他の漁師のオオダルを用いて操業することもあるが、それはお互い様であるから文句を言う者もない。

船は一個のオオダルに近づく。サキに立つ漁師がオオダルについたロープをテカギ(図-3)で引き寄せ船に積んだ小さな丸浮子(コダル)のロープに結び付ける。その後、船はオオダルを引張って岸に向かって全力で走り出す。図-2に示したようにアンカーとオオダルの間のたるみをとるためである。船の後でオオダルが水上スキーのように踊る。ロープのたるみがとれた所で船は一旦停止し、コダルにヒキナワを結び付ける。ヒキナワは片方600mのロープで、船のサキと、中央に分けて収納してある。船は岸に向かって右斜方向にまた全力で走り出す。ヒキナワはスルスルと船から離れて行く。径1.6cmのヒキナワが400m出終えると船

の進路をやや左に変え、径1.8cmのヒキナワを200m同じように湖中に投じて行く。計600mのヒキナワが出終る頃、船は岸に対して平行に進路を変え、スピードをゆるめ径6.0cm、長さ150mのオイナワを入れて行く。次にオイナワの先に付いている網を入れる。網は図-4に示したような構造を持ち、上辺には網を吊るためのアワ(浮子)が付き、下にはハナエと呼ばれる径7.0cmの沈子を兼ねたロープが付く。網はソデアミを左右に配する対称形で、中央に間口8.5m×6m、長さ26.5mのフクロアミが付いている。最終的に魚はフクロアミの中に追い込まれる。フクロアミの最終部付近にはもどりが付いており、魚が逃げ出さないようにしている。漁師はフクロアミ投入の際、布でくるんだ拳大の小石を網の中に入れる。これはフクロアミのもつれを防ぐとともに網をスムーズに延ばすためのものである。フクロアミを投入し終えると、反対側のソデアミを入れる。全長約85mを測る網本体は、陸上で広げてみると非常に巨大に感じたが、徐々に沈んで行く網は意外に小さく見え、漁師の言葉を借りれば、まさにウミに浮いたフンドシのようなものである。網を入れ終えた後、同一方向にオイナワを入れる。オイナワを入れ終えた所で方向を変え、スピードを上げコダルをめがけてヒキナワをどんどん入れて行く。船の後方にはゆっくりと沈んで行く網が見える。ヒキナワ、オイナワ、網は、湖底に二等辺三角形を描くように入れるのが理想であるが、広いウミ(湖)のことであるから正確にはコダルの所へは戻れない。そのため後で入れる側のヒキナワの先にはさらに40～50mのステナワと呼ばれるロープを余分に付け、オオダルの所へ余裕をもって戻れるようにしてある。

船がコダルに近づく、サキの漁師はテカギでコダルに付いたロープを引掛け船の中央に結び付ける。いよいよ網曳きの開始である。船の側面に付けたウィンチ付きのローラーを用い、まず岸に向かって左側のステナワから巻き始める。ステナワを巻き終えた段階で、網はフクロ網を中心として左右対称になっているはずである。ここで始めて左右のヒキナワを同時に巻き始める。ヒキナワには10ヒロごとに目印が編み込まれており、左右が同じ調子で巻き取れるように工夫されている。始めヒキナワは、グッ・グッ・グッ・とゆるやかな調子で巻き取られる。この時湖底では一杯



写-1 ヒキナワの巻きとり

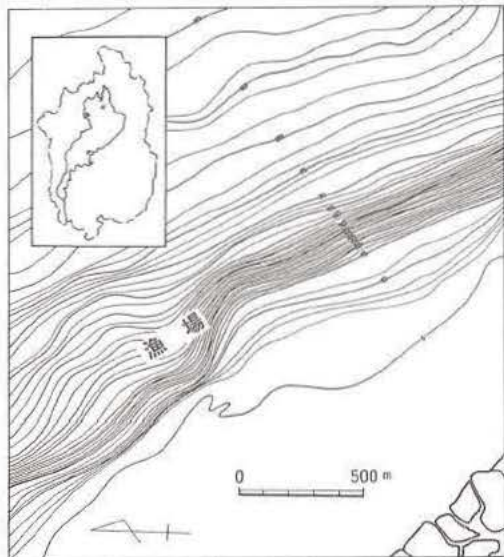


図-1 位置図 針江

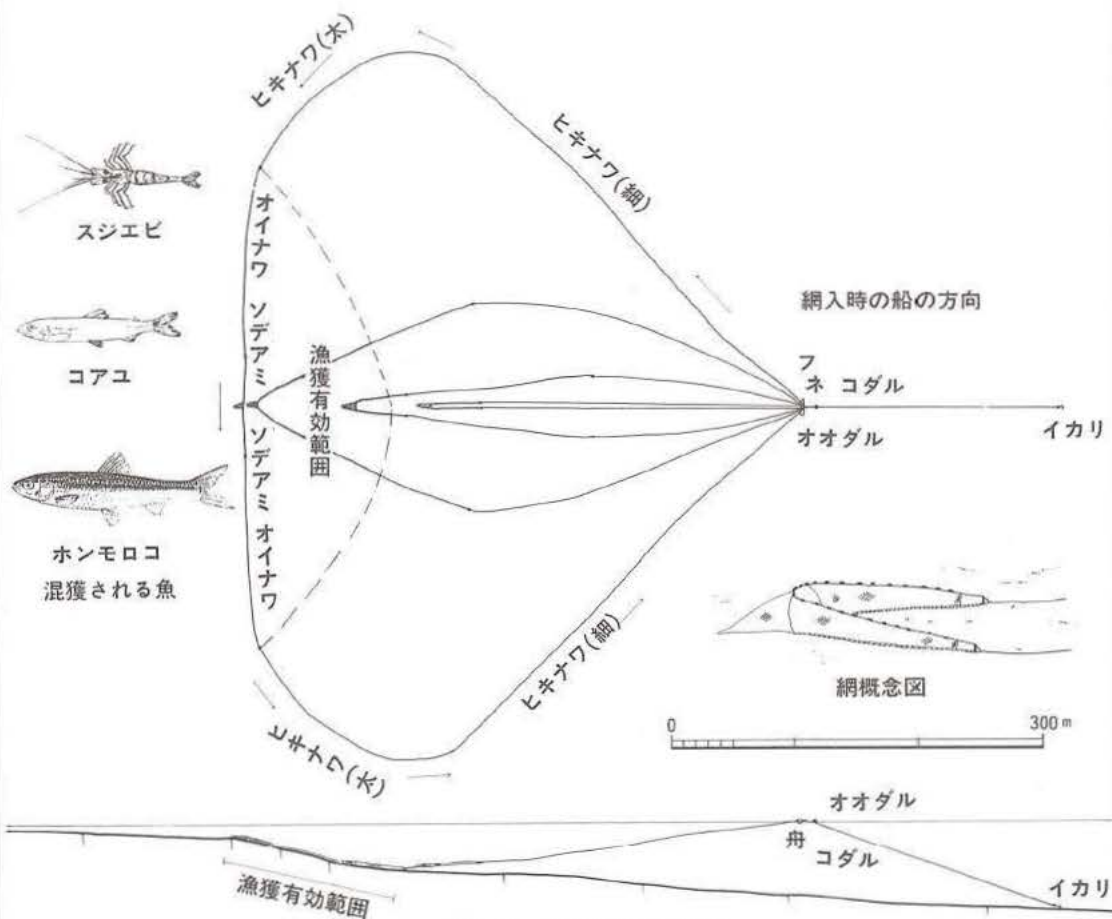


図-2 イサザビキ操業図



写-2 ソデアミの巻き取り作業



天井網



側面

フクロアミ

フクロアミはタテメの網地を使う

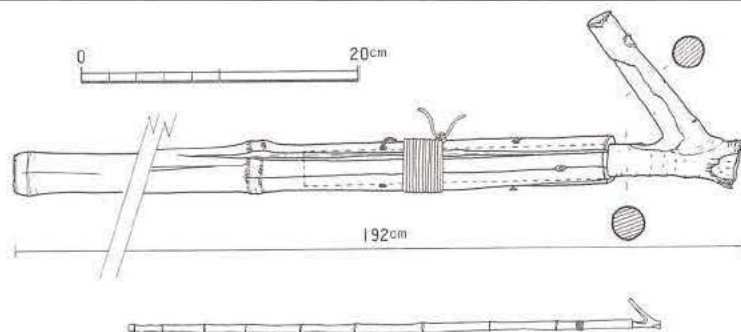
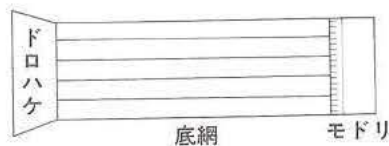


図-3 テカギ実測図



底網

モドリ

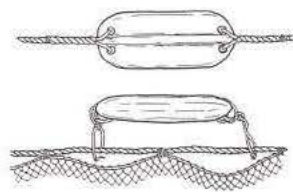


図-4 アワ実測図

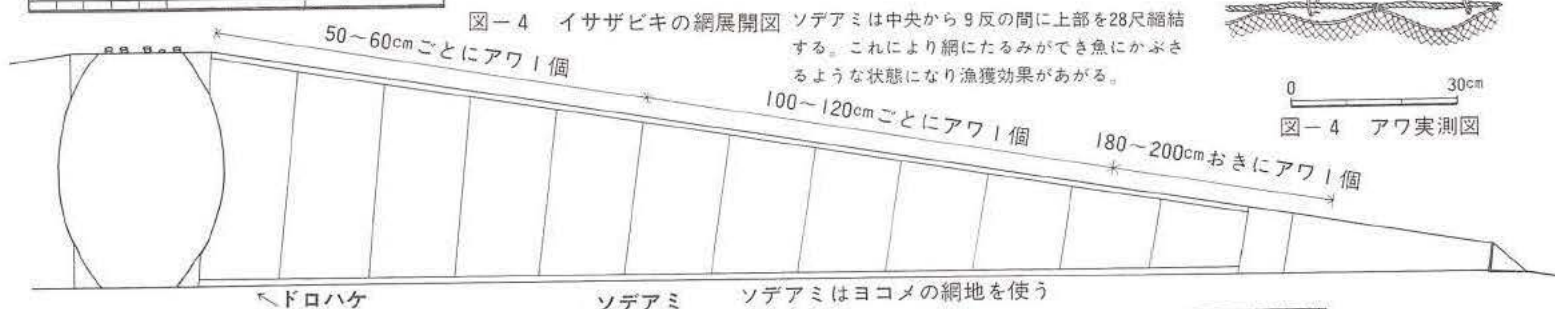


図-4 イサザビキの網展開図

ソデアミは中央から9反の間に上部を28尺縮結する。これにより網にたるみができ魚にかぶさるような状態になり漁獲効果がある。

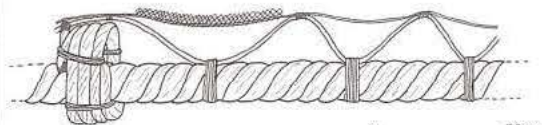


図-5 ハナエ・タンマ実測図

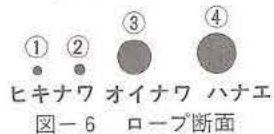
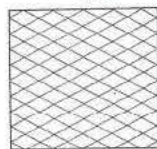


図-6 ロープ断面



ヨコメの網

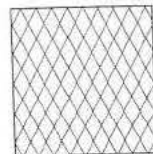


図-7

タテメの網

ソデアミ

ソデアミはヨコメの網地を使う

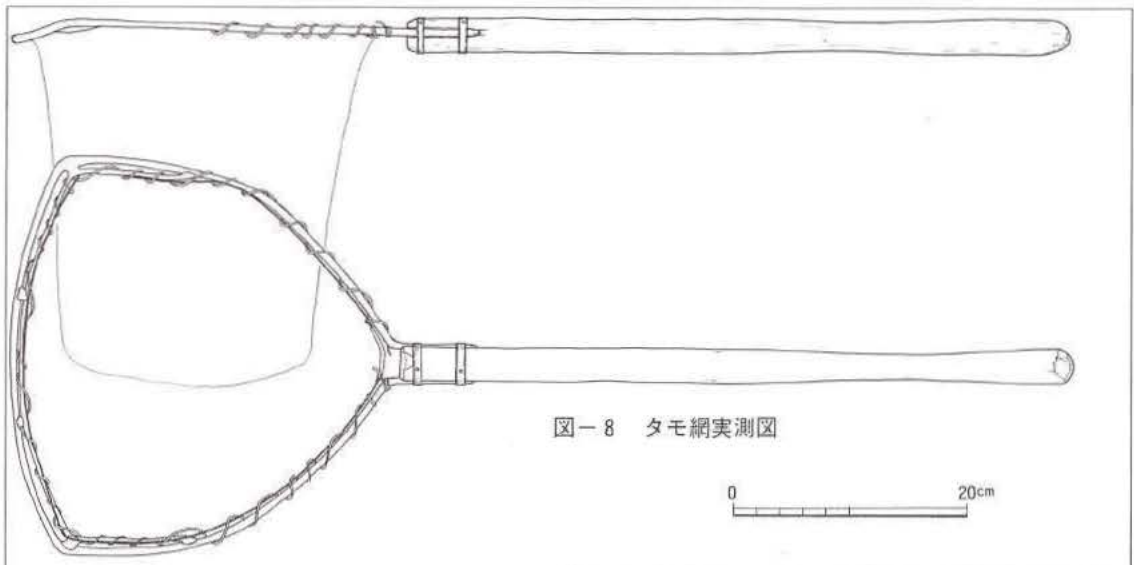


図-8 タモ網実測図

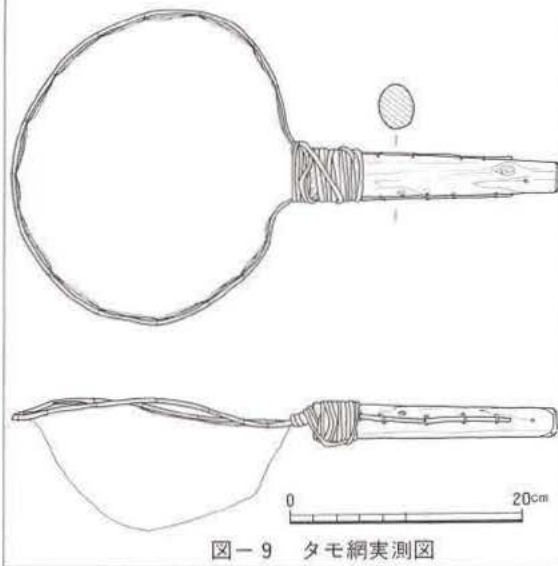


図-9 タモ網実測図



浮いたイサザをタモですくう

このためどうしてもナワの順序を逆にしておかないとスムーズにナワが出て行かないことになる。これに対し左側は、アミ、オйнаワ、ヒキナワの順で入れるため、巻き取りと同じ順序でまとめておけばよいことになる。

に広がったオйнаワが泥の上を徐々に狭められつつある。そして最終的には船の長さとはほぼ同じ幅まで寄せられる。このオйнаワの移動する範囲にいる魚がまさにオйнаワに追われるように中央に、中央に寄せられ、やがてソテアミに入り、最終的にはフクロ網の中に追い込まれて行くのである。

巻き取られたナワは、船底にトグロを巻いたように輪になってたまって行く。この輪を一抱えずつ岸に向かって右のナワはヘサキの上に、左のナワは中央のトモ寄りにそれぞれ収納する。この時ヘサキに置くナワは必ずひっくり返して置く。こうしておかないと次の操業にさしつかえるからである。すなわち、巻き取りは左右ともヒキナワ、オйнаワ、網の順であるが、網入れは、右側はヒキナワ、オйнаワ、網の順になされる。

最初のヒキナワ400 mが巻き終り、次の太いヒキナワを巻き始めると、上って来るロープから泥が漂い出す。このロープがまさに湖底に接地し、泥の上を移動して来たことが実感される。ここまでヒキナワを巻くと、巻き上げのスピードをダッ・ダッ・ダッ・という感じに速める。オйнаワがほぼ狭まり、もう寄せるべき魚がいなくなった状態に至ったためである。ヒキナワが終る頃、巻き上げのスピードはさらに速まりダッダッダッという感じになる。オйнаワも網も底を切り、もう入るべき魚はすべてフクロ網の中に納まった状態である。オйнаワが上り始めると、湖面はナワからしみ出た大量の泥で濁り、この濁りの中からいよいよソテ網が上って来る。いままで機械まかせにしていた漁師も、二人力をそろえて網を引き上げる。この時、

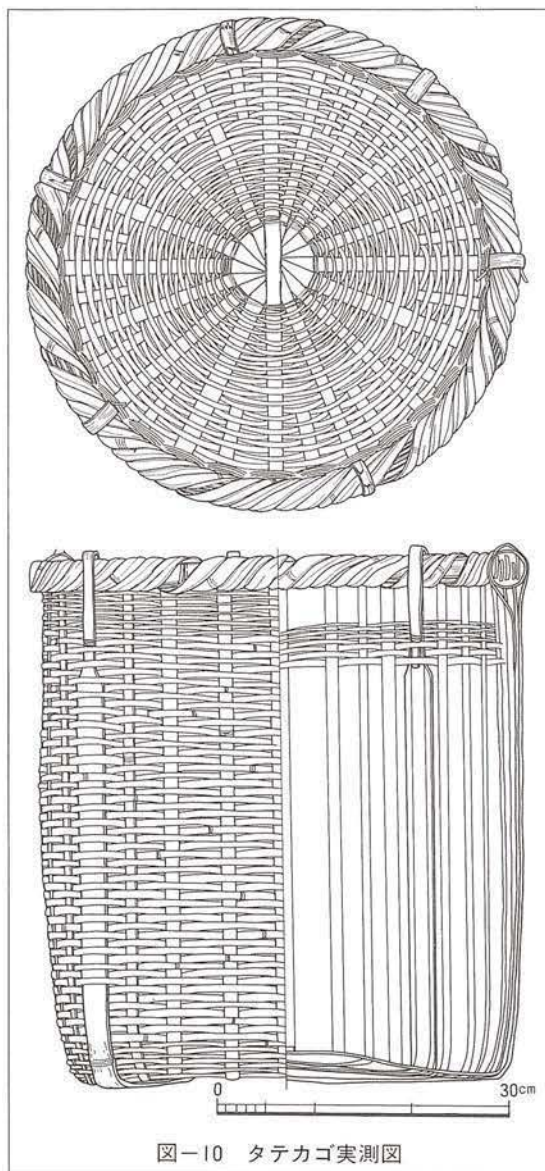


図-10 タテカゴ実測図

舟から少し離れた湖面上に白い固まりがブツブツと浮き上った。水深50m程の湖底から急に引き上げられたイサザが、浮袋を空気一杯にして浮いてしまったのである。大漁の時ほどこの白いイサザの固まりは早く浮き上る。ハナエを上げ終ると漁師は左右に分れ、フクロ網を内側からたぐり寄せせる。必死になって逃げようとするモロコやコアユの姿が見える。フクロ網の最終部までたぐり寄せると片方の漁師はタモ網(図-8)で中の魚を抄い獲り、船の中にしつらえた水槽に入れて魚を選り別ける。イサザは水に浮くが、他の魚は沈む性質を利用したものである。なる程、大多数のイサザは白い腹をふくらまして浮いている。この浮いたイサザを小さなタモ網(図-9)で抄い、ドロバコの中に入



エリカゴを使って魚を選り別ける。

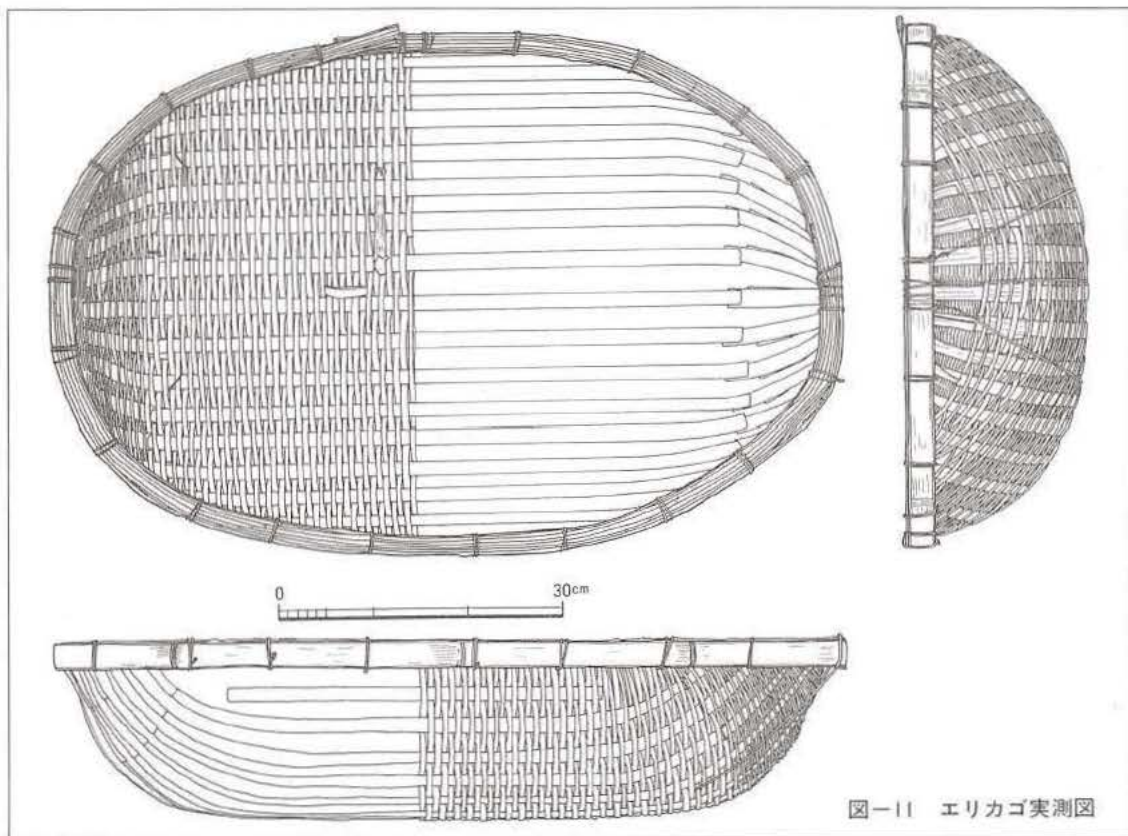
れる。少し前まではタテカゴ(図-10)と呼ばれる籠の中に魚を全部入れ、船の側面からウミに潰け、籠の中に浮いた魚をタモ網で抄い獲ったということであるが、波の高い日などは、船から落ちそうになることも度々あり、危険であるためこの漁師は今の方法に改めた。おおまかな選別を終えると、今度は水槽の中に残った魚をエリカゴ(図-11)と呼ばれる籠の中に入れ、手で選り別ける。籠の中には実に様々な魚が入っている。浮かびきらなかったイサザ、エビ、モロコ、コアユ、ハスゴ、ハス、スゴモロコ、フナ、ウグイ、カマツカ、時には大きなコイが入っていることもある。これらの魚からイサザ、エビ、モロコ、コアユの金になる魚をそれぞれ選り分け、その他は雑魚として一緒にしてしまう。

選別を手伝う。エリカゴの中から魚を選り別ける作業はなかなかシキクサイ。魚はコマカイし、ヌルヌルしてつかみにくい。おまけに雨に打たれ冷えきった指先はほとんど感覚がなくなっている。イサザ、イサザ、エビ、アユ、アユ、モロコ、ハヤ・・・、漁師の手は器用に動き見る間に魚を選り分けていく。ところがこちらはそうはいかない。ハスゴとアユ、モロコとスゴモロコをよく間違える。間違える度に漁師に指摘される。エリカゴの目の間にはさまったコアユは特にとりにくい。漁師嫁業もなかなか根のいる仕事である。

選別が一段落すると、船は前回曳いた所から少し角度を変えてヒキナワを入れながら走り出し、同じ作業を繰り返す。1回の操業を一(ヒト)カワといい、通常六(ロク)カワ曳くとのことであるが、この日は遅く出港したため四(ヨ)カワで操業を終え帰港した。本日の水揚げ、イサザ17kg、エビ30kg、モロコ10kg、コアユ8kg。その他雑魚であった。

イサザは泥地を好む魚である。そのためイサザ曳きにおいては泥対策が最も重要なポイントとなっている。すなわち、網の中に泥が入り込み、巻き上げ不能な状態になる事故がしばしば生じるからである。この状態を「ドロをクウ」と称する。

泥対策としてはまず、ソデアミの裾の部分には幅17



図一四 エリカゴ実測図

cmの带状に20節の網が付けられている。この網をドロハケといい、網の補強と、ハナエが巻揚げた泥をスムーズに後方へ送る役割りを持つ。また、フクロ網の入口の底面にも6.4 mの20節の網が付けられている。これも同じくドロハケと呼ばれ、フクロ網の中に泥が入るのを防ぐ役割りを持っている。また、ソデアミ、フクロアミの上辺に付けられたアワ（浮子）の位置と数にもドロをクワない為の注意がはらわれている。アワの数が少ない場合、ハナエは強く湖底に接地するため集魚効果は高まるが、泥をクワ可能性も高くなる。しかし、アワを増して浮力を強め、ハナエの接地力を弱めた場合、泥をクワ可能性は低くなるが、ハナエが湖底から浮き上る可能性も有り、集魚効果は限りなく0に近づく。ハナエの重量と、アワ全体の浮力のバランスが最も肝心である。図示した網の場合、泥に接している時間の最も短いソデの先の方はアワを少なくし、中央に寄るに従い数を増している。特にフクロ網の上辺には2重にアワを付け浮力を強めている。フクロは最終的な漁獲部であるから、間口を大きく広げる必要があるし、ソデに寄せられた泥の集束する部分でもあるため、浮力を強める必要があるのである。さらに、ハナエには、図5に示したように「タンマ」と呼ばれるロープを輪にしたものを付けている。これはこの回

転によりハナエが泥の中に入り込むのを防ぐための工夫である。泥の深い所にイサザが沢山おり、どうしても曳きたい時がある。このような時は、巻き上げのスピードを上げたり、ヒキナワを短くしたりして一カワあたりの時間を短くする。

もし網が泥をクってしまった場合、無理に曳けば網を破ってしまう。網の損失はその日の漁獲減にとどまらず、網の修理に数日間の休漁を余儀なくされることになり、実に大きな損害を被ることを意味する。

ドロをクってしまった時、まずオオダルに結んだロープをはずし、ヒキナワを巻く。そうすると網は動かず、船は徐々に網に近づく。もうナワが巻けなくなると船を網を中心とする円周上をゆっくりと走らす。これを気長に続けるうちにたいい網ははずれる。少々網がねじれるが、破れたり失なったりするよりはましである。

今回紹介したのは、動力化、大型化した1989年段階でのイサザビキである。船と網の巻き揚げを人力に置き換え、漁具の規模をスケールダウンすれば、昔のイサザビキの姿になるということである。

最後に貴重な体験と教示を与えていただいた針江の皆様へ御礼を申し上げます。

(大沼 芳幸・製図：大沼 直子)